

ために座右に備へしむるものとなつて來る。

(八)思想 彼の宗教思想は平々凡々の日常人の僞らぬ姿を彼自らの體驗凝視によつて見出され、要集に見られる人間性探求の結果は罪惡深重の凡夫といふ極めてありふれた一般的概念的な言葉に盡きてしまふが、吾人はこの普通の言葉の中に少くとも自己の罪惡觀の歸結を見出すと共に、惠心自らの體驗によつて新しい意義と言葉への新感覺とが吹込まれてあることを察知せねばならないであらう。

よつて本書は理智的な解義的な説教書としてではなく、我が魂の身慄ひを其儘に叩きつけた所に美的満足が認められ、茲に要集の文藝性なるものが發見されるのである。

要するに、私の云はんとする佛敎文學は深い佛敎的要素を持ちつゝ、しかも佛敎的欲求を持たぬ讀者にも文學としての興味を不知不識のうちに佛敎的雰圍氣に導入せんとするものを指す。故に往生要集は佛敎のための佛敎的作品でなく、佛敎的情趣の部分に文學的な情趣を入れた

所に、本書が佛敎文學と稱される所以があり、その本質も亦こゝに見出され、絶對的にも相對的にも價值づけられるのである。

#### 所謂寛喜の内省について

藤島 達朗

宗祖傳の、くとして寛喜の内省といふことがいはれるが、これは惠信尼消息第三通目と口傳鈔第十一によるのである。ところがこの二つの史料にて、後者は明かに前者によつて書かれておりながら、

その内容には、著しい差がある。即ち前者にあつては、それはかつて建保二年（宗祖四十二歳）上野國佐貫にゐた頃、宗祖は三部經千部讀誦を發願された。併し四五日して名號の外何物もなしと思ひ至りこれを中止された。然るにそれより十七年の後寛喜三年（五十九歳）四月になり宗祖は風邪にて臥床されることがあつたが、その時述懐されるに、臥床以來大經をよみつゞけてゐる、おかしいので考へてみると十七年前の讀誦のことに思ひあたつた、人の執心はおそろしく、よく／＼思慮せねばならぬと思つたら讀むことも

なくなつたことであると、ところで口傳鈔の方では、右のやうな年月は全くなく、三日ばかり臥床されやがて起きていわれるに三年の間三部經を讀みつゞけて来た、併し考へてみればおかしいことである故、それを深く思ひ定めるためにねたのであるといはれたとなつてゐる。即ち前者では人の執心、につきての反省が主であり、後者ではその前段だけを取り上げそれを誇張し助業の問題として取扱はれてゐるのである。

さて右の惠信尼消息のそれも、その最初の發表者鴛尾師により口傳鈔的に即ち建保以來寛喜三年迄十七年間讀誦されたと解釋されて以來、中澤、橋川、目下の諸師等にこれはうけつがれ、更に従つて教人信の宗祖の化他行は五十九歳も後であり、そうなつた理由は聖覺の唯信鈔をみられた爲であると發展した。併しこれは右消息の讀み誤りであり、三部經讀誦は明かに四五日で中止されて居り、十七年たつと寛喜三年のそれは、たま／＼熱のためうかび出た「執心」のすがたであつたと解されるのである。